
蝶々の庭

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶々の庭

【著者名】

リリイ

【ISBN】

N1404M

【あらすじ】

夢の中だからって浮氣しちゃってさよ。

小さな箱庭には彼と私しかいなかつた。

私は彼さえいればなんにも要らなかつた。

彼に近寄つて触れようとするものは全て拒んだ。

彼が少しでも私から離れよつとしたなら、一度と繰り返すことない
ように酷く痛め付けた。

何も見なくていいのよ。

あなたには私だけあれば。

醜くて惨めで、光が射さない深海のような

箱庭。

それでも彼は毎晩「愛してゐる」と言つてくれた。

私は毎晩髪を撫でられて眠つた。

心底私を失つることを恐れてゐるみたいに柔らかく繰り返される言葉。
まるで毛皮を失つた猫を撫でるような、痛みなど一ミリも感じさせ
まないとするような優しい手つきに撫でられて眠つた。

だけど私は、こんなに彼から全てを奪つて、彼の頭の中を無理矢理
私が埋め尽くしてみても、愛してゐるなんて全部ぜんぶ嘘でいつかい
なくなるくせにと思つていた。

本当に埋まるわけなんてないのだから。

数百と幾度日かの夜。

彼の隣で知らない女が寝ていた。

心臓がぎゅうっとして背中一面を針で突かれたような嫌な感覚。

ほらね、やっぱり裏切つた。

馬鹿にしやがって、死にたいのね。

瞬間、私は彼の横つ面を蹴り上げた。

首に掌をのせ、全部の体重をかけた。

白目にみるみる赤く細い血管が走っていく。

違う、夢だ、と口の端から泡と一緒に吹き出す言い訳を聞いた。

私は嘔吐き、嘔吐き、と咳きながらただ自分の手元を眺めて、親指が交差したこの掌の形は影絵の蝶々みたいだと思った。

浅い眠りを繰り返して、夢と現実の境目を見失った。

泣きながら起きて、ぐしゃぐしゃの顔をぬぐつて周りを見回すと彼はまだ静かに眠っていた。

いつもの穏やかな二人だけの箱庭。

夢だったのか、現実だったのかなんてもうどっちでも変わらない。もう邪魔ものはいれちゃいけない。

あんたが誰かのものになつたら、私は気が違つてしまつことだけはわかつたよ。

彼の首に広がつた葡萄色の蝶々を見るととても悲しくて、だけどやつと私だけのものになつた印みたいで愛おしくて。

その時やつと彼が毎晩言い続けていた言葉が私の体中を満たしていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1404m/>

蝶々の庭

2010年10月14日08時16分発行